

ケニア、都市部と農村部の子どもたちの日常生活

西 方 毅

はじめに

現代文明社会は、経済的豊かさ、情報の豊富さなどの点で過去のどの時代の社会とも異なるものである。この現代文明社会は、子どもたちの成長にどのような影響を与えるであろうか。体格や運動能力の年代による変化などについては多くの研究がなされている。しかし、そのようないわば「外面的」な事実については資料もあり比較も容易であるとしても、「内面的」な変化、すなわち行動・意識の変化については十分に検討されていない。そのような比較を可能にするような過去の資料が残っていないからである。

この研究では、現代文明社会の影響を受けていない子どもたちの資料を得るために、東アフリカの中央部Kenyaの子どもの行動や意識を調査する。Kenyaは発展途上であり、国全体の経済活動水準が低く^(註1)、日本ほど現代の物質文明が浸透していない。したがって、子どもたちは現代文明の影響を強く受けていないと考えられる。それらの子どもたちの行動・意識を検討することにより、現代文明の影響について何らかの示唆が得られると思われる。

もちろん、民族の文化があまりにも異なるために、子どもたちの行動傾向もかけ離れていることは考えられる^(註2)。その場合、物質文明の影響のみを分離することが困難になるかも知れない。しかし、文化の影響の少ないと考えられる行動・意識の特性もあると思われる。また、都市化の進展に伴い民族独自の生活様式や行傾向の崩壊^(註3)も進んでいる。したがって、ある程度は物質文明特有の影響のみ抽出することは可能ではなかろうか。

今回は、予備調査の一部、生活背景・行動調査の結果を報告する。

1. 調査の概要

1) 調査地域：Kenya共和国Kajiado県^(註4)

Kitengera町：Athi River G. K. Prison Primary School (以下、Prison P.S.と略)

Namanga町：Namanga Primary School (以下、Namanga P. S.と略)^(註5)

2) 調査方法：子どもたちの生活行動についての27質問項目を作成し、Kenyaの公用語であるスワヒリ語に翻訳した。翻訳は現地在住のスワヒリ語に堪能な日本人とKenya人の学校教員が担当した。

3) 調査対象：各小学校の5年生～7年生 計376名^(註6)

2. 調査結果

表 1-1 Kitengera

表 1-2 Namanga

1) 学年と年齢について

日本の場合は、戸籍制度が徹底していること、落第がないことなどから、小学校でも中学校でも、一般的には、同一学年は同じ年齢の子ども

	男	女	計		男	女	計
6年生	41	49	90	6年生	31	14	45
7年生	56	56	112	7年生	65	51	116
計	97	105	202	計	96	65	161

たちで構成される。同じように義務教育ではあるが、Kenyaでは一つの学年にかなり多様な年齢の子どもたちが所属している。Kitengeraの場合は7年生の年齢範囲は10歳から18歳と幅広い。Namangaの場合も同様である。このように年齢範囲が広いのにはいくつかの理由がある。

- ・生年月日を知らない子どもがおり、でたらめに記入している。
- ・飛び級制があるために、成績優秀であれば10歳でも7年生になることがあり得る。
- ・留年制度があるために、成績不良の場合は進級が遅れる。
- ・経済的な理由で休学、復学を繰り返す子どもがいる。

このような状況は、子どもたちに学校仲間の選択や学校での集団形成にどのような影響を与えるであろうか。この点は極めて興味深いので、今後さらに追求してみたい。

2) 部 族

Kenyaは40以上の部族からなる社会である。それぞれの部族は異なった言葉、生活様式や習俗を持っているが、都市化や生活の近代化の影響で、それらは次第に不明瞭になっていると思われる。

KitengeraやNamangaの場合、それぞれの学校に多くの部族の子どもが在籍している。同じ制服を着て同じ教室で勉強していても、帰宅すればそれぞれの部族の様式を保った家庭生活が待っている。それがどのように相互に影響するか、今回の資料からは検討できないが、極めて興味深い。

Kitengera と Namanga では、部族構成が異なっている。ここでは、それぞれの地域の人口の多い部族について見てみよう。ただし、今回の調査は、その地域の一部の学校を調べたものであり、ここで取り上げる数字は、その地域全体の部族構成を代表しているものではない。その点を十分念頭に置く必要がある。

Prison P. S. で最も多い部族はKikuyu族であり、全体の3分の1、33%（以下、小数点以下略して表示）を占めている。次いで、Luo族の18%、Kamba族の15%となっている。一方、

Namanga P. S. の最大人口を占めるのはSomali族であり、全体の3分の1、34%を占めている。次いで、Kikuyu族の23%、Maasai族の20%となっている。Prison P. S. の場合、Kikuyu族が多い。一方、Namanga P. S. の場合、Somali族が多数を占める。特定の部族が多い場合、その部族の習慣や行動様式が他の部族の子どもたちの行動、意識に影響することが考えられる。

表 2 部族構成

	KiT	Nam
Maasai	6.7%	19.2%
Kikuyu	32.7%	22.8%
Somali	1.9%	34.1%
Kamba	14.9%	6.0%
Luo	17.8%	0.6%
Luya	9.6%	2.4%
Kalenjin	1.4%	0.6%
Meru	1.4%	1.2%
Ingine(他)	11.5%	4.8%

解答率 98.1% 91.6%

それぞれの部族間には、対立意識なども存在すると思われるし、時にはそれが差別意識を生み出すこともあるだろう。この点は極めて微妙な部族感情などに関わるために困難ではあろうが、機会があれば検討してみたい。

3) 家の設備

Kenyaでは地方により送電線が敷設されていないところがある。Kitengeraまでは送電線が来ており電化製品が使用できるが、Namangaにはまだ来ていないために電化製品が使えない。そのために、Namangaの生活は、現代先進国の生活とは異なった様相を呈する。以下、家庭における現代的な器具類について見てみよう。

a) 電気

表3-1に見られるように、Kitengeraでは、53%、Namangaでは、22%の子どもが電気を利用していると回答している^(註7)。Kitengeraの場合とはかく、送電線の来ていないNamangaで、5軒に1軒が電気を利用しているとは考えにくい。事前の現地調査(2005, 西方)時の印象よりもかなり多い感じがする。これについては、現地での調査および基礎分析担当者、現地のアフリカ人協力者より、次の可能性が指摘された。

- ・見栄から、実際には来ていないにも関わらず、『きている』と答えた者がいる
 - ・一軒の家単位ではなく、Boma^(註8)単位で答えている
 - ・小学校でも7年生まで通学させる親の場合、家庭の経済水準が高い可能性があり、そのために、電気の来ている家庭が多い
- 以上の点については、今後、詳細な調査で確認したい。

表3-1 電気・水道

	電気	水道
Kit	53.4%	62.5%
Nam	22.2%	63.5%

b) 家電および文明の利器

電気がきていないと言うことは、家庭内の電化製品がほとんど無いということである。その点も含めて、文明の利器の使用状況について検討した。

表3-2 家電

	テレビ	ビデオ	ラジオ	掛け時計	腕時計	固定電話	携帯電話	自動車	バイク	自転車
Kit	69.7%	26.0%	90.9%	67.8%	62.5%	17.3%	61.5%	14.9%	1.0%	28.8%
Nam	13.8%	25.1%	81.4%	68.9%	65.9%	16.8%	56.9%	16.2%	4.8%	31.1%

Kitengeraでは、多い順に、ラジオ、テレビ、掛け時計、腕時計、携帯電話となっている。Namangaでは、ラジオ、掛け時計、腕時計、携帯電話となっている。なお、掛け時計または腕時計のどちらか一方、または両方ある家は、Kitengeraでは97%、200軒、Namangaでは92%、153軒に上った。これらの結果から以下の諸点が指摘される。

まず、電気の利用可能性とテレビ台数の不整合である。電気が来ていると言う回答は、Kitengeraでは53%であった。それに比べて、テレビがあると言う回答は70%となっている。テレビの台数の方が多いのである。これはどういうことなのだろうか。

これも、Boma内の台数で答えているのかも知れない。また、現地の調査協力者から、「実際は無いにもかかわらず、見栄で、『ある』と書いた者がいる」可能性も指摘されている。とすると、実際のテレビの台数は、ここであげた数字以下ということになる。その点を考慮しても、しかし、テレビは意外と普及しているようである。

ラジオ、時計、携帯電話の所有割合も実際よりも高い数字が出ている可能性がある。ただし、ラジオ、時計などは安価であるために現地でも入手はしやすいと思われる。また、時計やラジオは電池で動き、送電線を必要としない。電池はそれほど高価ではないなどの状況を考えると、ラジオ・時計がほとんどの家庭にあるとしても不自然ではない。

携帯電話が半分以上の家に普及していることについては、やや疑問である。現地で良く用いられるのはプリペイド式の携帯であるが、通話料は決して安くはない^(註9)。現地の人々の生活水準から見て、今回得られた数字は多すぎるように思える。実態は、もっと少ないように思われる。

ただし、これらの結果については留意が必要である。それは、子どもたちが「家にある」と答えた時、それがどのような状態で家にあるかということである。日本では「家にある」ということは、すなわち、「正常に作動している」「利用している」ことを意味する。しかし、Kenyaでは電気製品の故障が多く、修理されないまま部屋の隅に放っておかれることも多い。それでも、子どもたちにとって、「家にある」ということになるのではないだろうか。そうであれば、実際に用いられているわけではないので、日本流に言えば、「家がない」と同じことになる。この点を考慮すると、実際の利用率は、今回上げた数字よりも低くなる可能性がある。

以上の結果は、Kenyaの農村部での意外に現代的な生活を示している。時計はほとんどの家にあり、さらに、ラジオまでであるのである。したがって、日本のように分刻みではないが、生活の中で時間がかかり意識されていることは間違いない。このことは、次項であげる起床時間、就寝時間などの質問に対して、「9時45分」、「8時20分」などの回答があったことから伺える。「日の出と共に起き出して、日の入りと共に家路につく」という表現に近い生活をしてはいても、時刻の意識はかなり広く行き渡っているようである。

4) 家族構成

a) 一家の人数

まず、一軒の家に同居している人数であるが、Kitengeraでは平均5.8人であり、Namangaでは6.6人であった。この人数が住んでいる部屋は、Kitengeraで平均2.6部屋、Namangaで平均4.0部屋である。一見、KitengeraよりもNamangaの方が一軒の部屋数も人数も多いようである。しかし、これについては、すでに述べたBomaが関わっているかも知れない。つまり、子どもたちが「自分の家」と言うときに、日本では一軒の独立した家屋を指すことが多いが、KenyaではそれをBomaを指す言葉と捉える子どもが多いようである。このことは、Namangaでの実地調査(西方 2004)時の結果と、今回の回答とのギャップからも推測されることである。実地調査時に、現地のほとんどの家庭が1部屋ないし2部屋で生活している様子が観察された。それが、今回のアンケートでは平均4部屋になっている。現地の調査協力者によれば、「あなたの家には部屋がいくつあるか」と

言う質問が、「自分の住むBomaには部屋がいくつあるか」と誤って捉えられたのではないかとのことである。この点は、次回以降の調査で明確にしたい。

次に、KitengeraよりもNamangaの方が一軒の「家」に住んでいる人数が多い。これについては以下のような可能性が考えられる。Kitengera町はセメント工場や縫製工場のある産業の町であり、仕事を求めて移住してくる人が多い。その場合、移住は親子ないし、近親者だけで行われることが多いと推測される。その結果、いわゆる核家族が増加するのではないだろうか。

b) 親族の数

以上の解釈は、直系親族、親類数の平均からも裏付けられる。Kitengeraでは、Namangaよりも祖父母および、親類数（おじ、おば）の数が少ない。兄弟数、姉妹数もKitengeraの方が少ない傾向にある。

表 4-1 直系親族数

	祖父	祖母	父	母
Kit	5.3%	0.5%	70.2%	85.6%
Nam	8.4%	19.2%	59.3%	86.2%

表 4-2 親類数平均 (人)

	おじ	おば	兄弟	姉妹
Kit	2.3273	2.3485	1.9915	2.2558
Nam	5.05	4.9481	3.0446	2.6538

ところで、父親の数だけはKitengeraの方がNamangaより多い。なぜ、Namangaでは父親の数が少ないのであろうか。これについては明確ではないが、次のような理由が考えられる。一つは、伝統的な一夫多妻制の影響である。現在では、Kenyaでも近代的な一夫一婦制が中心になっているが、地方ではまだ一夫多妻の習俗が残っていると言われる。今回の質問では、「同居家族」として「父」「母」の存在を問うているわけで、一夫多妻の家庭では、「父」が同居していないケースが増えるものと推測される。もう一つの理由は、出稼ぎの影響である。Namangaでは産業と呼べるものがほとんどないために失業率が高い。そのために、父親がNairobiなどの大都会に出稼ぎに出てしまい、「同居」していないことになるのではないだろうか。この点については、今回の調査では不明である。次回以降、検討してみたい。

5) 生活

家電の項で見たように、KitengeraでもNamangaでも、ラジオや時計など時間を示す機器がほとんどの家庭に存在する。そのために、子どもたちの生活にも時間感覚は広く見られると思われるが、それでも、まだ、我々の先端現代文明世界とは異なる生活がそこに見られる。

a) 起床、就寝

まず、起床と就寝の時刻である。電気が利用できるKitengeraと電気がほとんど利用できないNamangaでは、この時刻、特に、就寝時刻に差が見られるのではないかと予想された。しかし、起床時刻の平均は、Kitengeraで5時37分、Namangaで5時45分と、ほとんど差がなかった。就寝時刻は、Kitengeraで9時11分、Namangaは9時5分であり、こちらでも差が見られなかった。

Namangaの子どもたちの就寝時刻が早いのは納得がいく。電気が使えないために夜はランプの元で生活しているのである。子どもたちは、夜にはすることがなく、眠くなるにつれ自然に寝てし

まうことになるのであろう。しかし、電気の来ているKitengeraでなぜ就寝時刻が早いのであろうか。これについては資料がなく判断できない。ただし、次のように推測することはできる。すなわち、Kenyaは経済的に豊かな国ではないために、書籍の所有数も少ないであろう。また、テレビゲームやCDなどもない。子どもが夜を過ごすための道具はほとんどないのである。それが早寝の理由ではないかと考えられる。このことは次項の結果からも支持される。

b) 夜間の活動

「夜、寝る前に何をしますか」という問いに対して、Kitengeraでは60%、Namangaでも66%の子どもが「勉強をする」と答えた。「遊ぶ」という回答をしたものはなかったのである。なお、何らかの手伝いをすると答えた子どもも何人かいた。子どもたちにとって、夜は「遊ぶ」時間ではないのである。

なお、「お祈りをする」という回答が30%前後あった。このことは、この質問が「就寝の直前の行動」と捉えられた可能性を示唆する。そうであるならば、今回の回答は、厳密には夕方以降の活動すべてを示しているものではないことになる。

いずれにせよ、夜間の活動として、「遊ぶ」という回答がまったく見られなかったことは興味深い。西欧や日本と異なる夜の過ごし方が、子どもの発達や心理的特性にどのような影響を与えるであろうか。今後、さらに詳細に検討してみたい。

c) 生活習慣

今回は生活習慣の中で清潔に関わる習慣のみを取り上げて調べた。表5-1にあるように、習慣のある子どもは9割前後に上る。ただし、現地の調査協力者の報告では、『毎日しなければならない』と学校で教えられているので、『している』と答えた者もいたようだ』とのことである。したがって、この数字は、そのまま実態を表すと考えることはできないが、定着率の高さを示唆するものであるとは言える。

なお、ここで、興味深いのは次の点である。まず、歯ブラシを用いる子の割合であるが、Kitengeraでは86%であるのに対してNamangaでは71%にしか過ぎない。この違いは何によるものであろうか。理由として考えられることは、生活水準の違いである。全般に、KitengeraよりもNamangaの方が家庭の経済水準が低いと推測される。そのために、歯ブラシを使わず後述する歯ブラシ木を使う家が増えるのではないだろうか。

表5-1 生活習慣

	顔洗い	手洗い	身体洗い	歯磨き	歯ブラシ	歯磨き剤	歯磨き木	指	他	着替え
Kit	97.1%	96.6%	98.1%	98.1%	86.1%	12.5%	7.7%	1.4%	0.5%	98.6%
Nam	88.0%	86.8%	91.0%	91.6%	71.3%	34.1%	39.5%	0.6%	0.6%	92.8%

一方、歯ブラシの木^(註10)を用いるという回答は、Kitengeraでは8%程度にしか過ぎないが、Namangaでは40%に上る。これについては、先に述べたように、経済水準の差が理由としてあげられる。

d) 手伝い

水道や電気などのインフラストラクチャーが十分でないことから家電製品も少なく、家事労働が多い。そのために、子どもたちは日常的に親の手伝いをしている。また、その内容も多岐に渡っている。

特に注目されるのがKitengeraでもNamangaでも、水くみである。先に水道の普及率について見たが、両方の町共に60%強である。では、なぜ、水くみの手伝いが必要なのであろうか。水道が「ある」と答えた子どもの場合でも、実は、その水道が、「共用」の水道である場合が多い。日本のように、各家庭の中に、少なくとも2カ所から3カ所水道が引かれているのではなく、何軒かの家に囲まれた共用空間の中央に水道が設置されているのである。その水道まで行ってポリタンクやペットボトルなどに水を汲み、家まで持って帰る。それを子供たちが担当するのである。

表5-2 手伝いの種類

	弟妹世話	水くみ	洗濯	動物世話	炊事	皿洗い	薪拾い	買い物	部屋掃除	畑仕事	荷物運び	他
Kit	26.9%	58.2%	45.7%	12.0%	49.5%	60.1%	11.1%	65.9%	54.8%	8.7%	13.0%	7.2%
Nam	36.5%	68.3%	47.3%	18.6%	43.1%	44.9%	21.0%	59.9%	46.1%	21.6%	18.6%	1.2%

その他、買い物、部屋掃除、炊事、洗濯など、子どもたちの手伝いはさまざまである。どちらの町の子どもたちも良く手伝いをしていると言える。また、手伝いの内容もほとんど同じである。ただし、買い物、皿洗い、部屋掃除ではKitengeraが、水くみ、畑仕事、弟妹の世話ではNamangaが、それぞれ割合が高くなっている。Kitengeraでは、欧米や日本と同様、親の仕事の補助が多いのに対して、Namangaでは、大人と同じ仕事内容、独立した仕事が任されているようである。

手伝いには、はっきりとした性差が見られた。Kitengeraで男女間で10%以上の差のついた項目をあげると男子に多かったものは水くみ、動物の世話、荷物運びなどであり、逆に女子に多かったものは、洗濯、炊事、皿洗い、部屋掃除などであった。この傾向はNamangaでもまったく同様であった。男子は父親と同様の外の仕事、女子は母親同様中の仕事と分けられているようである。

なお、数字を詳細に比較すると、KitengeraよりもNamangaの方が、男女間の数字の差が大きかった。都市部に近いKitengeraよりも、農村部に近いNamangaの方が、男女間の仕事の役割が明確に分離されているのである。また、部族による違いも考えられるが、今回は資料数が少ないために、その分析はしなかった。

e) 好きな遊び

物質文明の発達していないKenyaで、子どもたちはどんな遊びをしているのだろうか。自由記入で回答を求めたところ、Kitengeraの子どもの79%、Namangaの子どもの84%が「サッカー」と答えた。この項目でも男女差が見られた。Kitengeraでは、男子の93%、女子の65%が挙げており、Namangaでは、男子の97%女子の64%が挙げていた。どちらの地域でも女子はサッカーを好む傾向があるのだが、その割合は男子よりも低い。

サッカーの他に、ハンドボールやバスケットボールなどのボール遊びも挙げられたが、どれも10

%未満であった。また、かけっこなども挙げられたが、やはり10%未満であった。その他、伝統的な遊び(Estaesta:石蹴りのような遊び)などを記載した子どももいたが、数例にしか過ぎなかった。

3. 要 約

以上、Kenyaの子どもの生活について以下のような点が明らかになった。

- 多部族国家であり、地域的に部族構成は異なる。そのためにその地域特有の雰囲気生まれると思われる。一方、学校で同じ制服を着て、同じクラスで一緒に授業を受けるなど、部族間の垣根が低くなる傾向も見られる。それらの影響はかなり複雑であると思われる。
- Kenyaでは全般に家族の人数が多い。特に、農村部の方が都市部よりも人数が多い傾向がある。ただし、父親だけは都市部の方が多い。これは、農村部独特の要因、出稼ぎや伝統的な家族形態などに原因があると考えられる。
- 農村部では電気の利用できない家庭が多いために、テレビなどの電化製品は少ない。しかし、時計やラジオ、携帯電話など、電池で動く機器類はかなり普及しており、現代化が浸透しつつあることが伺える。
- 清潔の習慣は、かなりの割合で実行されている。歯ブラシの使用には現代化の影響が見て取れる。ただし、この点は、経済的な要因もからむために、断定はできない。
- Kenyaの子どもたちは手伝いを良くする。その手伝いは大人の補助的な役割ではなく、生活の一部の仕事を独立して、かつ、責任をもって担当するものである。先進国のイメージの「手伝い」とはかなり異なる。なお、手伝いの内容には男女差が見られた。
- 子どもたちの遊びは、サッカーなど外での遊びがほとんどである。家庭内での遊びは見られない。このことは就寝時刻からも見て取れる。電気があまり普及していないこともあり、就寝時刻は9時前後である。それに伴って起床時刻が6時前後と早くなっている。

上記のようなKenyaの生活環境は子どもたちの行動・意識などにさまざまな影響を及ぼすと考えられる。それらについては、次回以降、さまざまな面から検討して行きたい。

アンケート用紙作成、調査の実施などは次の方々に委託した。Kenya、CBO Bring Up Future Group 相原功志氏、Jacinta Aihara氏、NGO Saidiafraha 荒川克巳氏である。ここで、記して感謝申し上げる次第である。

(注1) Kenyaの1人当たりGDPは\$1,022であるが、これは、日本の一人当たりGDP \$26,755 (いずれも2000年度)の4%弱に過ぎない。(世界各国要覧 2005)

(注2) Namangaの子どもの中に、毎朝午前4時頃起きるものがある。これは、熱心なイスラム教徒の家庭の子どもであり、早朝の礼拝のために起きるものである。日本の子どもではこのような生活習慣は皆無であろう。

(注3) 典型的なものが部族間の結婚である。都市化により、異なる部族の人々が入り交じって住むなどの状況が生じ、その結果、部族間結婚が増加する。

(注4) Kajiado県はKenyaの南部に位置する地域で、ほとんどがサバンナであり、年平均気温も低い。雨期には雨が降り農業も盛んである。Kitengera町は、首都Nairobiから30kmほど南にあり、人口8

万人とされる。工業が発展しており、電気も水道も完備している。テレビのある家も多い。一方、Namangaは、さらに、南に100kmほど下ったKenya・Tanzania国境の町で、人口は4万人と言われる。農業主体の地方の町であり、送電線も水道も敷設されていない。

(注5) Kenyaでは、2000年よりPrimary Schoolが義務化され、同時に無償となった。Primary Schoolは8年間である。

(注6) 部族名や性別の記入がないものもあり、質問紙回収数と表の合計数とは差がある。

(注7) Namangaでは、自家発電装置を有する業者がおり、電線を敷設して有料で配電している。高価であるために(敷設費用9000円、使用料:400円~1400円/月)経済的に余裕のある家しか利用できない。

(注8) Bomaとはスワヒリ語で、敷地の周りの囲い、または、囲いに使う植物、自分の住んでいる区画などを指す言葉である。Bomaに、親類がそれぞれ家を建て、あるいは、長屋風の家の一部屋一部屋に別れて住んでいる。「自分の住んでいる家」とは、「親類も含むその区画全部」と捉える子どもがいる。

(注9) 最近、Kenyaでも携帯電話の基地局があちこちに作られ、Namangaでも使えるようになってきている。ただし、端末は4000円~12000円、通話料も1分で30円~45円と高いために、頻繁に用いられているとは考えにくい。

(注10) “Peel”などと呼ばれ木で、インドやアフリカで古くから歯磨きに用いられたとされる。短く折った枝の先を石などでつぶすと繊維質が残りブラシのようになる。このブラシを歯磨きに用いる。

参考文献

- Bogonko, S. N. 1992 Reflections on Education in East Africa. Oxford University Press.
 George, S. 1993 Education in Kenya since independence. Printpak Nairobi Kenya.
 早瀬保子 1999 「アフリカの人口と開発」 アジア経済研究所
 西方 毅 2005 「東アフリカ農村部の子どもの生活」保育学会第58会大会 大妻女子大
 豊田俊雄 1998 「発展途上国の教育と学校」 明石書店
 丹埜靖子 1990 「Kenyaの教育」-文献からのアプローチ アジア経済研究所
 東京書籍編集部 2003 「世界各国要覧」第11版 東京書籍
 ユニセフ 2003 「世界子ども白書」UNICEF

【要約】

現代の社会で生きる子どもたちは、現代文明からさまざまな影響を受けて成長している。そのような影響を明確にする試みとして、発展途上国の子どもの行動、意識などと日本の子どもたちのそれらと比較検討することにした。今回は、その一歩として、Kenyaの子どもたちの生活実態について質問紙法による調査を行った。対象は、Kenyaの首都Nairobi近郊の町、および、Kenya南部の農業・牧畜地帯の町にあるprimary schoolの5年生から7年生である。結果からいくつかの点が明瞭になった。Kenyaは多部族社会であり、学校でもさまざまな部族の子どもが存在している。画一化された教育の元、部族の独自性が次第に薄れるものと推測される。一般に家族の成員数は多く、平均して6人前後であるが、都市近郊の町は農業・牧畜地帯の町よりも家族数が少ない傾向にあり、都市化の影響が伺える。電気が来ていない、あるいは、生活が豊かでないためにテレビなどの家電製品は少ないが、ラジオや時計、携帯電話などはかなり普及しており、現代文明がかなり広く影響を与えていると考えられる。特に、子どもたちの生活では、時間についての意識が明瞭に表れている。子どもたちは大人の手伝いを良くしている。特に、農業・牧畜地帯の子どもたちほど良く手伝いをし、また、大きな責任を負っているようである。子どもたちの生活には遊ぶ道具がほとんどなく、サッカーやかけっこなど野外の遊びがほとんどある。そのために、夜間もすることがなく、学校の勉強を済ませると9時頃に寝てしまう。早寝のためか、起床時間も6時頃とかなり早い。